



二〇 今様のことどもの(七八段)……………三三

二一 何事も入り立たぬ様(七九段)……………三三

二二 人毎に我が身に(八〇段)……………三三

二三 屏風障子などの(八一一段)……………三三

二四 下部に酒飲まする事(八七段)……………三六

二五 或者小野道風の書ける(八八段)……………三六

二六 奥山に猫またといふもの(八九段)……………三六

二七 或人弓射る事を習ふに(九二段)……………三六

二八 或人任大臣の節会の(一〇一段)……………三六

二九 高名の木のぼり(一〇九段)……………四〇

三〇 双六の上手(一一〇段)……………四〇

三一 今出川のおほい殿(一一四段)……………四〇

三二 寺院の号(一一六段)……………四〇

三三 養ひ飼ふものには(一二一段)……………四〇

三四 雅房の大納言は(一二八段)……………四〇

三五 花は盛りに(一三七段節略)……………四三

目次終

三六 悲田院の堯蓮上人(一四一段)……………三六

三七 能をつかむとする人(一五〇段)……………三六

三八 一道にたづさばる人(一六七段)……………三六

三九 相模守時頼の母は(一八四段)……………三六

四〇 城陸奥守泰盛は(一八五段)……………三六

四一 吉田と申す馬乗(一八六段)……………三六

四二 よろづの道の人(一八七段)……………三六

四三 或者子を法師になして(一八八段前半)……………三六

四四 徳大寺の故大臣殿(二〇六段)……………三六

四五 龜山殿建てられむとて(二〇七段)……………三六

四六 平ノ宣時朝臣(二一五段)……………三六

四七 園の別当入道は(二三一一段)……………三七

四八 人の物を問ひたるに(二三四段)……………三七

四九 丹波に出雲といふ所(二三六段)……………三七

五〇 八つになりし年(二四三段)……………三七

附函……………三六

本書の組織とその趣意

本書は大学の一般教養学科及び高等学校国語科教材として、徒然草から五十段を抄出したものであるが、学習者諸君の予習の便に備えるため、これに語釈篇と助動詞・助詞篇を添えた。

本文篇

第一 処世訓と解されるもの(段数 33)

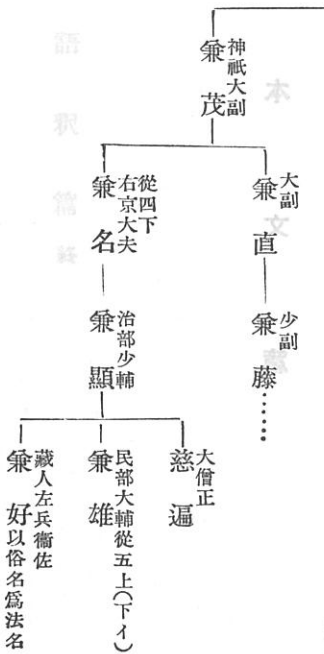
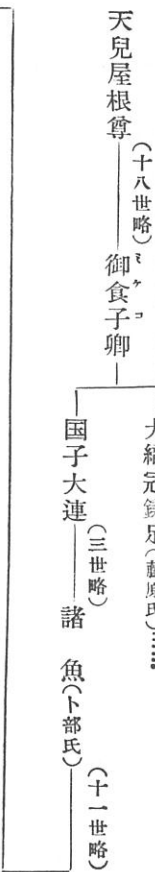
本書にとつた徒然草の五十段を、その内容によって分類してみると、およそ次の如くである。

- 以下に示す数字の( ) 外のは全本の段順、( ) 内は本書の章順を示す。
- 一〇(二)・一一(三)・八一(三三)・一六(三三)以上、すなほに落ちついた生活態度をすすめたもの。
- 五六(一四)・五七(一五)・七七(一九)・七八(二〇)・七九(二二)・一六七(三八)・二二(三三)・四七(二)・一八五(四〇)・一八六(四一)・一八七(四二)―一道に達した専門家の重んずべき事、且その道を得る心掛
- けを説いたもの。
- 四七(一〇)・一〇一(二八)・一一一(三三)・一二八(三四)・一四一(三六)―人に対する愛情・思いやり、

又動物愛護の精神の貴さを説いたもの。

九二(二七)・一八八(四三)・二〇六(四四)・二〇七(四五)―精神を統一緊張して事に当るべきを説き、且

徒然草六段に「子孫がはせぬては侍の末子孫のおくれ(男)輪へるはわらさ事なり」とある「わらし」も不体裁ナキノミダと兼好系図  
徒然草には見当たらないが、平安朝の物語によく用いられている「入わらし」という語がある。これは入朝ガワルイ・体裁ガワルイといふ意であるが、この「入わらし」の「入」を解したのがこの「わらし」



(尊卑分脈に拠る)

つれづれなり 1  
ひぐらし 1  
よしなしごと 2  
あやし 2  
ものぐるほし \*

一 つれづれなるままに

つれづれなるままに、日暮し硯に向ひて、心に映りゆくよしなしごとを、  
\*そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂はしけれ。(序段) 2 1

設問

一 徒然草の著者と、その出来た時代をお答えなさい。  
二 この序によると、徒然草はどんな種類の文学作品でしょうか。  
【註】 終日執筆した何枚かの草稿を読み直して、その感想を書き添えていにしてあるが、実は徒然草全篇の序である。  
○そこはかとなく 複形ク複詞形、漠然ト。アテドモナク。

いへお 1  
つきづきし 1  
あらまほし 1  
よきひと 2  
のどやかに 2  
いなす 2  
いまらかし 3  
きらめか 3  
ものふる 3  
わざとならぬ 4  
すこの 4

二 家居のつきづきしく

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、飯の宿りとは思へど興あるもの  
なれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一きは 2  
しみじみと見ゆるぞかし。今めがしくきららかならねど、木立ものふりて、 3  
わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子、透垣のたよりをかしく、うちあ 4  
る調度も昔覚えて安らかなるこそ、心にくしと見ゆれ。 5

一 つれづれなるままに 二 家居のつきづきしく